

第2回交流研究会 会議録

日時：平成18年11月23日（木、祝） 11時30分～16時00分

会場：うるぎ温泉「こまどりの湯」レストハウス

「ジュイールどうろく」；摘み草料理体験

出席者：こまどりの湯

三遠南信地域連携センター

S T いう

とよがわ流域大学の会

三遠南信アミ



1、つみくさの里拠点施設「こまどりの湯」の取組み

< 所長の説明 >

- ・何も無い地域の生き残り策・他の町村との差別化策として、自然を活かそうということになり「摘み草で村の活力を」というアイデアが生まれた。

日本つみくさの会会長・野草研究者：篠原 準八氏との出会いがあり、支援や指導を受けた。

- ・平成12年から、民間主導行政支援の村まるごと「つみくさの里うるぎ」の取組みをスタートさせ、浜松や豊橋のカルチャースクールで摘み草料理体験等を行い、PR活動を活発化させてきた。

- ・平成16年、「NPO法人つみくさの里うるぎ」を設立。平成18年、全国摘み草サミット（新宿）に参加してアピールを行った。これを契機に現在、軽井沢の星野リゾート施設に出荷（受注納品）している。使い手とのコミュニケーションを図り、ニーズに合わせた発送形態等の工夫が必要。

現在、「摘み草」事業に取り組んでいる全国10箇所の地域と、将来ネットワークを形成して出荷体制を整え流通にのせてゆくことも検討中である。

- ・コモンズ支援金（県助成金50万円）を活用し、1,000株の摘み草（ユキノシタ、カンゾウ類、オオマチヨイグサ等）を植えた。
- ・地元子供達の摘み草の学習実践として、売木小学校の生活学習（資料；つみくさノート）や、中学校の地域の見直しを行う総合学習での取組みがある（資料；“摘み草の精”（絵画）の包装紙）。
- ・今後の課題として、村民の理解、協力、積極的な参加を促すには、経済効果を生む事業としてゆくことが必要。また摘み草を取り巻く自然環境の変化により、近隣町村と連携して供給体制を整えることも必要になってきている（ユキノシタの減少等）。その他に摘み草についての知識を高める取組み（認定試験、資格制度等）。都市農村交流（グリーン・ツーリズム）事業との連携や地元の体制強化等が課題としてあげられる。

2、摘み草料理の体験

- ・ 地元で、摘み草をメニューとして提供している農家レストラン（ログハウス）
「ジュイールどうろく」において食体験。

どうろく

付近にある道祖神の通称（奥田家の屋号になっている。）

- ・ 料理人の奥田さん（経営者）から食材について説明を受ける。

摘み草料理

手づくりこんにゃく味みそ和え（ピーマン、にんじん）

酢の物（キャベツ飯田の名産；塩イカ、すいばの葉）

きくいものサラダ、ヤーコンのきんぴら（まこも、にんじん入り）

こうたけ（きのこ）とにんじんの和え物、

玉子焼き（めびる、ユズ入り）、ナズナの和え物、あけびの皮の和え物、

天ぷら（ナズナ、ユキノシタ、シモワラビ、ノビル、ヤーコン）

味噌汁、もちきびの雑穀ご飯

《感想》

地元の摘み草へのこだわりと地元ならではの料理方法等、売木村の自然と食文化が育んだ摘み草料理に、今後の地域振興の活路を期待。



3、三遠南信地域連携センター「地域づくりサポーター」の取り組み

～「ジュイールどうろく」の2階で会議を続行～

<参加した大学生の感想>

- ・ 地域づくりサポーターで、売木村に関わったのは今年で2回目。
- ・ 学生提案事業として、「売木村新米プロジェクト」に参加。籾蒔き・田植え作業や11月3日の「新米まつり」に企画段階から参加。ダイレクトメールのデザイン作成や来場者アンケートを実施した。アンケート結果、村への提言、サポーターの活動レポート等をまとめた報告書を売木村に提出した。

- ・農家の方と顔の見える関係づくりが重要。都市部に住む学生にとって貴重な体験となった。今後の継続性が課題。地元受け入れ側は、企画の押し付けでなく学生の自主性等を引き出す工夫が必要。

<センターからの補足説明>

地域づくりサポーターの今後の課題として、サポーターの増員、活動の定着化等があり、これまでの積極的な学生の自主活動にまかせるだけでなく、「地域づくり」や「中山間地域」に関する勉強会を開く等、制度的な取り組みを始めている。

4、三遠南信地域連携センター『地域経営・地域づくり評価システム開発事業

- ・事業背景には、平成 13 年の総務省の過疎対策がある。
- ・事業の目的は、地区力の点検・評価の仕組みを開発して新たな地域経営・地域づくりに活かすことを目指している。
- ・現状から愛知県東栄町古戸地区：問題認識型、長野県下條村地区：課題発見型、静岡県浜松市（旧天竜市）熊地区：活動開拓型と捉えることができる。来年度も継続して取り組み、現状認識のうえ施策を提案してゆく。

（資料；平成 17 年度三遠南信地域連携施策検討業務委託報告書概要、第 4 回地域づくり・地域評価システム開発研究会資料、地区力点検資料）

- ・様々な課題が浮上。
 地域力の数値化の問題や結果の読み取りの問題。
 評価システムは“誰が、何のために必要なのか”。
 どのような関わりを持ちながら、誰が中間支援をしてゆくか。
 誰が地域づくりの担い手になるのか等。

5、三地域連携活動プランについて（次回の三遠南信発見・交流フォーラムを念頭に置きつつ）意見交換

- ・売木村の取り組みを参考にして、地域の見直しや地域資源の掘り起こしから「地域食文化」のテーマをフォーラムに盛り込む。
 「食」を通して三地域への関心や地域連携の意識を高める。
 三地域を結ぶ「みちの活用」による食文化（食と農業、食と環境、食と暮らし等）の発掘・体験等について考え、地域づくりのヒントを引き出す。
- ・エリアをしぼって、地域資源の情報収集やテーマルートづくり等を実践する。
- ・センターの「地域づくりサポーター」をヒントにして、三遠南信地域のサポーター制度を検討し、多様なサポート内容を考える・・・地域の紹介・PR、体験交流（グリーン・ツーリズム等）、事業交流（見本市開催等）など。

6、三遠南信地域連携ビジョン検討委員会の報告

第 1 回の委員会では、「三地域住民の連携活動はまだ活発化していない」「三地域の情報の共有化が必要」といった意見を出した。今後も三遠南信発見・交流フォーラムの活動や本研究会の内容で、ビジョンづくりに関するものは委員会に出してゆきたい。

（資料；第 1 回検討委員会抜粋資料、信濃毎日新聞記事）